

氏名	小林 由美子 (コバヤシ ユミコ)
本籍	東京都
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博乙第 32 号
学位授与の日付	2023 年 9 月 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	高齢期の健康関連レジリエンス尺度の開発と関連要因の検討

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	長 田 久 雄
	(副査) 桜美林大学教授	鈴 木 隆 雄
	桜美林大学教授	杉 澤 秀 博
	国立長寿医療研究センター 副部長	西 田 裕 紀 子

論文審査報告書

論文目次

序章.....	1
1 研究の背景.....	1
1) レジリエンス尺度の開発.....	1
(1) レジリエンスという言葉.....	1
(2) レジリエンス研究の沿革.....	2
(3) 先行研究の到達点と今後の課題.....	3
(4) 心理社会モデルとリザーブ・モデル.....	9
2) レジリエンスの関連要因.....	10

(1)レジリエンスに影響を与える要因	11
(2)フレイルへの影響	12
2 本研究の目的	13
1)目的と意義	13
2) 全体の構成	13
3) 用語の操作的定義	13
4)インターネット調査, COSMIN, 倫理的配慮, 他.....	14
第1章 レジリエンス尺度の開発.....	28
1 目的	28
2 方法	28
調査 A.....	28
1)対象者	28
2)調査項目.....	28
3)調査方法と分析	29
調査 B.....	30
1)対象者	30
2)調査項目.....	30
3)調査方法と分析	32
3 結果	32
4 考察	33
5 結論	35
第2章 レジリエンスの関連要因.....	49
研究 2-1 レジリエンスに影響を与える要因	49
1 目的	49
2 方法	49
1)対象者.....	49
2)調査項目	49
3)分析	51
3 結果	51
4 考察	52
研究 2-2 フレイルへの影響.....	53
1 目的	53
2 方法	53

1)対象者	53
2)調査項目	53
3)分析	53
3 結果	54
4 考察	55
結論 (研究 2-1, 2-2).....	55
第3章 総合考察	66
1 主な知見と特徴	66
1)主な知見.....	66
2)本研究の特徴	67
2 レジリエンスをどうとらえるか	67
1)高齢期の健康関連のレジリエンスの特徴	67
2)類似概念との違い	67
3)レジリエンスはどう高まり, どう活かされるか	68
4)今後の展望	68
3 本研究の限界と今後の課題.....	68
謝辞	70
資料.....	73

論文要旨

本学位請求論文は、老化による機能低下を単に補うだけでなく、快復、適応を促進し、心理的成長力を強化することが、公衆衛生上の課題として挙げられているが、これに対処する新しい概念として提案された高齢期のレジリエンスに関して、健康関連レジリエンスに焦点を当て、心理面から捉えて検討することを目的としている。この目的を達成するために、本論文では、健康レジリエンス尺度の開発と、この尺度と関連する要因の研究がおこなわれている。

本学位請求論文は、3章から構成されている。第1章では、健康関連レジリエンス尺度の開発が行われている。第2章では、開発された尺度と、諸要因との関連が研究されている。第3章では、総合的な考察が行われている。

第1章の尺度開発では、まず、内容的妥当性を検討するために、cognitive interviewが行われた。65歳以上の地域在住の男女22人と新宿区四谷高齢者総合相談センターの介護支援専門委員7人を対象としてフォーカス・グループ・インタビューが行われた。2回の調査

によりモデル選定のための40項目を抽出し、その後3回目の調査によりモデルの適合度を改善させ23項目を決定した。独自モデルであるリザーブ・モデルでは、従来の心理社会モデルと異なり、経験値、人生の目的、ヒトとの関係志向、意識的健康管理に着目している。この結果をもとに、COSMINの基準に準拠して進められ、2つの調査が行われた。1つ目の調査は、全国の70歳以上の400人に回答を求め349人を分析対象とし、候補項目40項目を確証的因子分析により検討した。2つ目の調査は、1つ目の調査と異なる全国の70歳以上400人に回答を求め、380人を分析対象とした。2つ目の調査では、適当度の改善を目的とし、確証的因子分析、および積率相関係数、 α 係数により23項目の信頼性、妥当性が確認された。さらに、2回目の調査対象から100人に対して、再検査信頼性の検討を行うために回答を求め、先着の50人中47人を分析した結果、17項目の尺度が確定した。以上の果有は、研究倫理審査を経てInternet調査で実施された。以上の結果は、独自のリザーブ・モデルは、心理社会モデルより適合が高かったが、その理由は、心理モデルの活発化と自然体には、経験が生かされており、リザーブ・モデルの経験知が、これらの上院概念であった可能性が考えられた。また、全ての項目に置いて女性の得点が有意に高かったことから、男性のレジリエンス向上の工夫が必要であると考察された。

第2章のレジリエンス尺度と関連要因の検討は、上記の2回目の調査と同様の対象に対して、17項目の健康関連レジリエンス尺度と、死の認識（5年以内に友人や家族を亡くした、主治医がいる、終末医療の話し合いをした）、運動習慣、健康度自己評価、孤独感、うつ病の疑い、疾病経験、フレイル、人口学的要因に関して検討が行われた。その結果として、有意な影響があった要因は、孤独感（全体・男性・女性）、運動習慣（全体・男性・女性）、主治医いる（男性）、終末医療の話し合いをした（全体・男性）、うつ病の疑い（女性）であった。男性と女性の得点分布が異なることも見出された。主治医がいる、終末期の話し合いをした、が有意な関連があったことは、死そのものを考えるよりは、主治医や終末期について考えるという日常の自然な流れの中で、死を自覚し、人生の再構成をし、レジリエンスと関連する可能性が考えられた。女性では、うつ病の疑いと孤独感が男性より大きな影響があり、これがレジリエンスと関連する重要な要因となることが考えられる。

第3章の総合考察では、本学位請求論文の特徴としては、高齢期の特徴に焦点を当てたこと、心理社会的視点に対する独自の視点を持つこと、健康関連レジリエンスという公衆衛生学的視点を持つことであることが述べられている。また、レジリエンスをどう捉えるかに関して、高齢期のレジリエンスの背後に生活機能の予備力が重要であること、レジリエンスとコーピング、補償を伴う選択的最適化理論との相違を指摘していること、結晶性知能との類似性が考えられること、不可避で進行性である老化に対するという観点で公衆衛生学的意義があること、レジリエンスは運動習慣など他の要因と相互に影響しながら生活機能を高める可能性があること、および今後の展望と課題が示されている。

論文審査要旨

本学位請求論文は、高齢期において、単に老化による機能低下を補うだけでなく、快復、適応を促進し、心理的成長力を強化することが、公衆衛生学上の課題として挙げられているが、これに対処する新しい概念としてのレジリエンスを、就中、健康関連レジリエンスに焦点を当てて心理面から捉え、検討することを目的としている。この目的を達成するために、健康関連レジリエンス尺度を開発し、その尺度と関連する要因に関して検討する実証的研究がおこなわれている。尺度開発研究においては、cognitive interviewにより内容的妥当性の検討を行った後、COSMINの枠組みに従い、確証的因子分析等を用いて信頼性・妥当性の検証が行われ、17項目の尺度が決定された。その後、開発された尺度と、死の認識、運動習慣、健康度自己評価、孤独感、うつ等の疑いと関連が検討された。主な結果として、健康レジリエンス尺度は、孤独感、運動習慣、主治医がいる、終末医療の話し合いをした、という変数との有意な関連が認められ、男女での得点分布が異なることが明らかとなった。

学位請求論文が提出された後、主査・副査により査読が行われ、提出時の題目である「高齢期の健康関連のレジリエンス尺度の開発および内容的妥当性、関連要因、分析例の検討」が冗長であるとの指摘があり、口頭審査の場で修正を行わせた。これにより博士論文の水準に充分達していると評価し、合格とした。

口頭審査要旨

2023年7月16日に、学位請求論文審査として、申請者による30分の口頭発表、30分の質疑応答が行われ、その後、主査・副査により合否の審査が行われた。本論文は、身体面での機能低下がみられる老年期において、うまく年を取る、その時の心の強さに関して研究されたことは、老年学、老年心理学に貢献でき、意義が認められると評価する意見があった。独自モデルが、何に対する独自モデルかわかりにくい、レジリエンスとうつ等の関連要因との因果関係が不明瞭である、Internet調査におけるsampleには偏りがあるのではないか、分析例の中のモデルは、他の要因の影響などを考慮する必要があるのではないか、レジリエンスに対する発達や加齢の影響はどのように考えられるか、という質問があり、独自モデルに関しては内容に基づき命名を行うこと、因果関係は慎重に考えて関連に留めるよう検討すること、samplingに関しては課題を明記すること、本研究ではレジリエンスの発達や加齢に関する検討は目的としていないことが回答され了解された。その後、学位請求論文の題目を論文内容に、より合致させること、因果関係やモデルの記述を慎重に検討し、論文の構成を尺度開発と開発された尺度と関連要因の検討という形に整えること、という指摘がありその場で修正を行った。これにより博士論文の水準に達したとの評価に至り、本学位請求論文、および口頭審査の結果は、主査・副査が全員一致して合格であると判定された。